

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 91 号

平成 21 年 11 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-お 912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第一部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス）より（6）

12月3日

あなたがいつか本気に聖書を読んでみようという気になったら
実際キリスト教というものを知り、その価値を学ぶには、それが
最良の方法であり、いつまでもそうであろう、先ずぬかりなく、
あなた自身の弱さを、ないしは、そういうことに気乗りしない「古
いアダム」のことを、念頭に入れておきなさい。そして、何か全く
興味が持てないか、理解できないことに出会ったら、すぐさまそれ
以上読み続けることをやめなさい。

聖書の各篇を残らず知ることは、疑いもなくよいことである。し
かし、その中のかなり多くのものが、勉強し始めた人々には無意味
であったり、奇異な印象を与えることは否定できない（それでもこれ
らの篇がないほうがよいなどとは思われない）。そこでまず、福音書から読
みはじめるがよい。そうすることはとりわけ大切であり、しかも誠
実な人ならばだれにでも、間違いなく深い感銘を与える。その次に
は、史書（創世記からエステル記までの諸篇）を読むがよい。古代の他の
歴史書で、これに匹敵するものは一つもない。そのあとで、詩篇と
ヨブ記を、それから預言書を読みなさい。最後に使徒たちの手紙と
使徒行伝とヨハネの黙示録を読むがよい ここらからわれわれの

歴史がはじまることになる。旧約の箴言や伝道の書や雅歌は、昔の詩や格言を集めた興味深い著作として読むことができよう。かりにこれらの言葉がブツダ(仏陀)から出たものであったり、ヴェーダ(バラモン教の基本聖典)に載っていたとしても、きわめて高く賞賛されるであろう。

それはそうとして、聖書の中のどの篇をとくに好むかは、全く個人的な問題である。詩篇第37篇と第73篇は、「悪しき者の栄え」(詩篇73の3)について心の惑いにおちいった時に、一番慰めになる歌である。有名な詩篇第90篇は、おそらく最も古い祈りであろうが、今日もなお当時と同じように新鮮で美しい。同じく第91篇は古くからすべての戦士や勇士の愛好した歌であった。ヨハネによる福音書は、キリスト教の内的本質を最もよく表わしたものである。マルコによる福音書は、直接の証人たちの新鮮な記憶に従って書かれた、おそらく事実による最も古い物語であって、ごく簡単に記されている。しかしこの福音書の終りの箇所については、私の知るかぎり、批判をまぬかれないものがある。けれども、これらの諸文書については、読む人が本当に誠実であれば、読者の体験で証しされた内的真理のほうが、そうでなくても完全に信用できるとは限らないあの歴史的批判などよりも、はるかに大切なものである。

とにかく、内容の豊かさと魂を揺り動かす力とにおいて、聖書にくらべうる書物は昔も今も存在しない。

1 2月5日

私のくびきは負いやすく、私の荷は軽いからである。

(マタイ 11 の 30)

しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助け下さい」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか。」(マタイ 11 の 30,31)

おおよそ、私の名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てたものは、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受け継ぐであろう。(マタイ 19 の 29)

「主はその愛する者に、眠っているときでも、なくてはならぬものを与えられる」(詩篇 127 の 2)。その意味は、神に愛せられる人々は、あくせく努力したり、こびへつらい、あるいはさらによくはない手段を用いて、成功栄達をはかる必要がない。彼らには、仕事、生活費、よい結婚、友人、元気、健康、必要な場合の休養など、すべて主な人生の宝が与えられるというのである。けれども彼らとしては、神の命令をためらわず、即刻、忠実に履行し、仕事をなし、神の賜物をまごころをこめて使用し、それで隣人をも助けようとしなければならぬ。

神およびキリストとともに生きることは、この世での格別やさしい生き方である。それは、一種の無邪気な気軽さをさえ生み出す。そしてこのような気軽さは、この世のどんな享樂にもまして人間の生活を楽しいものにすることができる。しかもそうするためにはお金はほとんど、いや、むしろ全然いらぬ。そのような生活に必要なものは、ただ神とのゆるぎない交わりだけである(こんな場合に「ただ」という言葉を使ってよければ)。このような生活は、不幸な人々にとってまことの救いである。実際、彼らがこのような救いを知って、それを求めるならば、必ずそれは与えられるからである。

マタイ 11 の 30, 14 の 30, 31, 19 の 29, ヨハネ 15 の 7, 16 の 24・33、ヨハネ第 1 の手紙 5 の 3、マラキ 3・14 - 18、20。

1 2月9日

キリストが理解したとおりの、いわばキリストのキリスト教というものを真剣に考えて、素朴で善良な人間の本当の手本になりたい人が誰かいてくれたらと、ふとそういう考えを抱くことがしばしばある。このような人になることは、現代においても、いや実は、昔よりも今の方がずっとより善いことであり、また、より容易にもなっている。

そのような人になるために、並はずれた天分や教養は、すこしもいらぬし、まして、なにか特別な地位などなおさらいらぬだろう。真に善き意志を持ち、真理への絶えまない誠実な追求心があれば、たしかに誰でも、例えば、特にすぐれた牧師と同じように、樵夫(きこり)でも、そういう人になることができ、それによって隣人の道を照らす光ともなれる。

これ以上に真実なことはない。あなたが本当にそう考えるなら、生涯の決定的瞬間にダビデ王に起こったことが、いくらか違った仕方、あなたにも起るであろう。ある声が「あなたがその人です」(サムエル記下 12 の 7)とあなたの耳に言うにちがいない。あなたはぜひとも、あなたにできること、そしてわれわれの時代や国民にとって必要だと考えることを実行しなさい。それ以外の目的はすべて棄ててしまいがよい。実際、その他の目的は、あなた自身にも比較的価値が乏しいと思われるだろうし、また、他の人たちによって十分に処理されてもいるからである。

そのような人間になることの意味がわかりもしない他の人がどうしてそうするだろうか、またその意義を認めているあなたがどうしてそれを免れようとするのか。それではいけない。あなたはこの第一の義務を果たしなさい、他のすべてのことはすてておくがよい。そして、今日からすぐ始めなさい。

12月16日

見よ、神はこれらすべてのことを再び、みたび人に行い、その魂を墓から引き返し、彼に命の光を見させられる。

(ヨブ記 33・29、30)

人生は、その大部分が短い決定的な行動からなっている。そして、これらの行動のあと、再び穏やかな生活の流れがかなり長い期間つづく。この間に、いろいろな経験を重ねて、生活の原理が獲得され、また確立される必要がある。そうすれば、行動にあたってとくに熟慮しなくてもその原理に従って本能的に実行することができる。行動するときになって、自分が何をなしうるか、また何をしたいのかを、考慮しなければならぬようでは、たいてい初めから失敗するにきまっている。現代は軍事上でも認められているように、行動に移る決定的瞬間には、「心理的要素」がきわめて大きな役割りを演じる。それまでに十分に獲得された力と原理をもって、勇敢に事にあたる者は、決定的な勝利をおさめることができる。そしてこの勝利が、その後長い期間にわたって、その人の運命を決定する。これに反して、あやふやな態度で戦いにのぞむ者は、降伏するか、退却するかであって、前に向かって進む代わりに、人生のこの時期とその課題とを全部、初めからやり直さねばならない。...

こういう時最もたしかな助けとなるのは、神に対する堅固な信頼と、来るべき事柄について神から必ず与えられる警告や準備を聞く鋭い耳である。神に信頼するものは、その声をきく注意深さのほかは、どんな人間的な利口さをも欠いてよいくらいである。なにか重大なことが起るときには、つねに神から予告され、あらかじめ慰めと約束とによって十分に力づけられ、行動のさなかにも、その人自身では出しえないほどの勇気を授けられる。ヨブ記とキリスト受難史とは、この上なく雄弁なその実例である。

12月17日

あなた方に言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。(マタイ 12・36)

私の舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。あなたは後(うしろ)から、前からわたしを囲み、私の上
にみ手をおかれます。(詩篇 139.4 - 5)

神よ、どうか、私を探って、わが心を知り、私を試みて、わがも
ろもろの思いを知ってください。私に悪しき道のあるかないかを見
て、わたしをとこしえの道に導いてください。(詩篇 139・23 -
24)

不親切な言葉や無益な言葉を決して口に出さぬこと、だが、発言
することが大切で必要な場合は思いきってそうすること、冷淡で高
慢な、少なくともそう思われるような沈黙をかたくなに守らぬこと、
このような態度が大切である。なぜなら、言葉は、少なくとも行為
と同じくらい、多くの禍いの原因となるからである。また「無益な
言葉」(マタイ 12 の 36)は、もしその多くの罪をつぐない、そしてそ
れを改めさせる神の恵みがなければ、一人一人の人間が重ねる罪は
山のように高く、その全体の姿を目(ま)の当たり見れば、だれでも
戦慄を覚えずにはいられないほどであろう。そこで、よい実を獲る
ためには、その木をよくするよりほかに手立てはない。

詩篇 139 の 2 - 5・23・24

1 2 月 2 3 日

よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けられる者でなければ、そこに入ることは決してできない。

(ルカ 18・17)

その時代時代の学問的な神学と、キリストが望んでいた真のキリスト教との間にはつねに差異がある。これを指示している典型的な箇所は、ヨハネによる福音書第3章である。学者のニコデモはキリストを訪ねて、たしかにまじめに「相手の好意をうるための美辞」をならべる、つまり、今日のいわゆる相手を一応「ほめ」て、それによってこの無学者のキリストに敬意を表しておき、そのあとでなにか教訓を垂れようとの肚(はら)であった。けれども、キリストは、次のように答えて、ニコデモの教訓を簡単にさえぎった、「わたしたちは、自分で見たり聞いたりして知っていることを語っているのに、あなた方は学んだり研究したりしたことを語っている。」

これが今日もなお存在する両者の相違である。人はキリスト教を「教え」ることができない。ただキリスト教へ導き、おだやかに入門指導をすることができるだけである。それはただ相手がしだいに自分で聞いたり見たりすることができるだけである。その限りでは、キリスト教は、実際、学問の性質よりは、むしろずっと秘教の性質を持っている。

しかし、秘教といっても、キリスト教はその部分がだれの目の前にも開かれている。それにもかかわらず、多くの人たちはそれを見ることも、把握することもできない。しかもそれは、必ずしも無学者のせいとは限らず、むしろその逆である。だから、キリストみずからも、神の国を幼な児のように、すなわち、さまざまの学問的研究によってではなく、固い信仰を持って受け入れない者は、どんなことがあってもそこへ入ることはできない、と言っているのである(ルカ 18の17)。神学はなくてはならない。それがなければ非常にさしつかえるだろう。しかし、神学は決してキリスト教そのものではない。

12月27日

仕事や用事で多忙な世界にいと、われわれは正直にこう言うことができるのはもっともだ、「わが魂はもだしてただ神をまつ。わが救いは神からくる。」(詩篇 62 の 1) 享樂にばかりふけていてはなかなかそうは言えない それとは反対に、単なる静寂と孤独だけの生活で、神と共にある力強い生活がそれと結びついていなければ、それは誘惑に対する護りにも、完成への道の助けにもならない。

この地上で最もよいのは、この二つの状態が互いに交代することである。

それゆえ、修道会などの宗教的団体は、なんらかの実践的な仕事を持たねばならないし、忙しい活動家は静寂な時間を必要とする。そして神は彼らにそのような静かなときが必要だと見ると、病気を通じてそれを贈られる。

真のキリスト教は、あらゆる宗教や哲学の中で、静寂主義からも、俗事への心酔からも、人をまもる唯一のものである。このことを完全に知る人は、この教えがきつと天から来たものだというにちがいない。実際、この地上ではこのようなものは生長しなかった、すっかり形式主義におちいったユダヤ教からも、また、当時の古典的ギリシア・ローマの文化からも。

1 2 月 3 1 日

わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなた方と共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなた方はそれを知っている。なぜなら、それはあなた方と共におり、またあなた方がたのうちにいるからである。(ヨハネ 14.16,17)

これからはひたすら正義と善とに仕えよう、しかもそうする機会が求めずして現われるに従ってそれをしよう、と、一旦固い決意を抱いたならば、...日も月も季節も年も、いや生涯の終りの大多数の出来事さえも、気にかからなくなり、暦もほとんど無用の道具になってしまう。

時間というものは、時間から主として享楽を期待して活動を期待しない者にとってのみ、価値と意味を持つのである。

さあ、安心しなさい。あなたが、これまでと違った者になろうとまじめに思うなら、人間の知恵や教えなどなくてすませる時期が訪れるであろう。なぜなら、あなたは全くひとりでに、すなわち、浄められた本性のおのずからな衝動と傾向から、いつも正義と善を考え、かつそれを行うことができるからである。

ダンテ『神曲』煉獄篇第 27 歌 110-142 行、ヨハネによる福音書 14 の 16,17。

そうになったら、神があなたのためになされたご苦労に対し、またようやく目標に達したあなたの生涯について、神に感謝をささげなさい。

ではその日までごきげんよう。また、そうなるために勇気を持ちなさい。...

(あとがきの文章)

あなたは健康になりたいか

イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」といわれた。

(ヨハネによる福音書 5.6)

(今日、古典的教養を修めた大多数の人たちも、「円熟と喜びに満ちた老年について、よりよき来世の生活についても、真の希望をもっていない」と述べたあと、)われわれに可能なもう一つの人生行路は、神の「導き」による生活である。その導きが約束するのは次のことである、

「わたしはあなた方の年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ書 46 の 4)

「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ」(同 27 の 5)

「あなたが右に行き、あるいは左に行くとき、そのうしろで『これが道だ、これを歩め』という言葉が耳に聞く」(同 30 の 21)

「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる」(同 32 の 18)

「弱ったものには力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年のものも疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望むものはあらたな力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」(同 40 の 29,30,31)

「あなたに向かって怒る者はみな、はじて、あわてふためき、あなたと争う者は、滅びて無に帰する。しかし、あなたは主によって喜び、イスラエルの聖者によって誇る」(同 41 の 11,16)

「あなた方は、さきの事を思い出してはならない。また、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。私は荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」(同 43 の 18,19)

「わたしは東から猛禽を招き、遠い国からわが計りごとを行う人を招く。わたしはこの事を語ったゆえ、必ずこさせる。わたしは、この事をはかったゆえ、必ず行う」(同 46 の 11) ...

「あなたは義を持って堅く立ち、しいたげから遠ざかって恐れることはない。また恐怖から遠ざかる、それはあなたに近づくことがな

いからである。すべてあなたを攻めるために造られた武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべ等の受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である」(同 54 の 14,17)

「主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる」(同 58 の 11)

「あなたは主の手にある美しい冠となる。花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ばれる」(同 62 の 3,5)

「彼らの勤労は無駄ではなく、その生むところの子らは災にかからない。彼らは主に祝福された者のすえであって、その子らも彼らと共にいるからである。彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、彼らがなお語っているときに、わたしは聞く」(イザヤ書 65 の 23,24)

「母がその子を慰めるように、私もあなたがたを慰める。あなたがたは見て、心喜び、あなたがたの骨は若草のように栄える。これを見て、主の手がしもべらと共にあり、その憤りがその敵にむかっていることを知る」(イザヤ書 66 の 13,14)

(注 これらの箇所はすべてイザヤ書から引用したものである。それに対する人間からの側からの応答は、詩篇第 18 篇である)

このような神に導かれる生活と世間の普通の生活との相違は、前者には、不安もなければ、気晴らしや多くの休養の必要もなく、最後には自己欺瞞の必要すらなくて、つねに事柄や境遇をあるがままに直視することができることである。...

次にこの道を歩いていけば、必ずしも健康や不屈の力さえも必要でなくなる。むしろそれらは、この道においてこそ、一層しばしば与えられるものであるけれども。体の弱い人や病人たちも常にたのしく活動することができ、別の道を歩む健康な人よりも、人類のためにより以上の仕事をなしとげることが多い。

さあ選びなさい。この二つの道からあなたは自由に選ぶことができる。